近藤 真

大人のための恋歌（れんか）の授業

〝君〟への想いを詩歌にのせて

太郎次郎社エディタス

はじめに

ようこそ、恋歌の世界へ。

「戀という字を分析すれば　糸し糸しと言う心」（中村風迅洞『どどいつ万葉集』）。中学生の私は、国語の先生から教わった都々逸で、この複雑な旧字体を一瞬にして覚えてしまいました。

旧字体の「戀」（𢖍）をじっくりと眺めてください。「心」の上に乗っかっている音符の「䜌」は何に見えますか。そそり立つ山？　鬱蒼と茂る森？　ホールいっぱいに交響する音楽？　あるいは複雑に絡みあった糸？

「䜌」について白川静の解説です。

「言の両旁に糸飾りを垂れている形。言は神への誓約を収めた器。祝詞の器（𠙵）の上に自己詛盟の意味で、入墨の辛（針）をそえた形」（『字通』）

頭でっかちの音符を、意義符の「心」が懸命に支えています。この心、けなげで

しょう。押しつぶされそうになりながらも、ひしゃげた姿でじっと耐えています。恋という感情の、胸をぎゅっと締めつけられた心の姿そのままです。

当事者にとって、恋はかけがえのないライフ・ストーリーです。そこには人の数だけの物語が紡がれています。それは文学のことばを得ることによって、多くの人びとの共通の物語になるのです。古今東西の詩人たちがその仕事をしてきました。

この本における私の役割は、読者のみなさんと恋の詩歌とをつなげ、素敵な出会いへといざなう媒介者（メディエイター）です。詩人たちのことばに耳を澄ませば、やがてあなた自身に降り積もっているあの日、あのときの心のときめきや、せつない思いが呼び起こされることでしょう。

＊――本書で引用した詩歌については、読みやすさの観点から、送り仮名を加える、旧字を新字に改める、難読漢字に振り仮名をつけるなど、必要に応じて表記を改めました。

大人のための恋歌の授業

目次

はじめに……3

第一章 初恋

情熱に満ちた明治の恋歌（与謝野晶子◇若山牧水◇正岡子規◇中川富女）……12
まだあげ初めし前髪の〝君〟へ（島崎藤村）……16
四連の恋のドラマ……18
それぞれの思い出にかたどられた〝君〟……24
白秋の「初恋」のものがなしさ（北原白秋）……29
少年時代の淡いあこがれ……32
「初恋や」で一句詠む（炭太祇）……33
恋の先にある静かな情愛（炭太祇）……38

第二章 恋の三歩手前で

恋の予感（成瀬櫻桃子◇高濱虚子◇橋本多佳子）……42
胸に秘めた思い（沢田はぎ女◇島田陽子）……47

しなかったことの後悔の深さと長さと（石川啄木）……54
狂おしく恋に焦がれて（萩原朔太郎）……57
まだ見ぬ恋人へのあこがれ（三国玲子◇三橋鷹女）……60
その名前を呼ぶだけで（鈴木章）……62
どこかにいる「あなた」への呼びかけ（山之口貘）……66

◉歌詠みの恋文〈1〉――寺山修司……71

第三章 恋に一歩踏みだして
特別な一日のはじまり（川口美根子）……74
恋のきっかけ（時実新子）……76
二人の距離が縮まるとき（新川和江）……82
その人の名を告げる（土岐善麿）……85
激情の行き先（寺山修司）……87
一刻の猶予も許されぬ問い（河野裕子◇永田和宏）……90
沈黙を育てる（小島ゆかり）……97
ファーストキスの思い出（檜紀代◇梅内美華子）……99

第四章 恋のまっただなかで

［Ⅰ］

静謐のなかに浮かべる世界（中原中也）……104

逢ひ見ての後の心をめぐって（権中納言敦忠）……110

白秋の詠んだ永遠の「君」（北原白秋）……117

「好き」の先にある憎悪（長谷川かな女◇鈴木真砂女◇北原白秋）……124

［Ⅱ］

食べること、恋をすること（俵万智）……130

二人の時をはかるゴンドラ（栗木京子◇十谷あとり◇道浦母都子）……138

時空を超えて詠まれあう恋（紀野恵◇在原業平◇小野小町◇和泉式部◇藤原定家◇式子内親王）……144

ハイネの真率さに愛を学ぶ（ハインリッヒ・ハイネ）……152

精いっぱいの悪口に愛をこめて（谷川俊太郎）……161

◉歌詠みの恋文〈2〉——北原白秋……168

第五章 別れのうた

二人でいることの孤独（ジャック・プレヴェール）……172
恋の終わりを告げる知らせ（高柳重信）……178
一人の部屋で待つ（大西民子）……180
失恋の自分にくだす判決（村木道彦）……183
思いとどまって書くラヴ・レター（谷川俊太郎）……190

第六章 なつかしむ恋

ぎしぎしと林檎を裂いたあの日（山崎方代）……198
命がけの恋に生きた日々（鈴木真砂女）……200
記憶を呼びさます花の香り……203
別れし人に歌で連なる（心敬）……208
いつの日かまた会うまでの別れの歌（尾崎左永子）……215
◉歌詠みの恋文〈3〉——芥川龍之介……223

第七章 夫婦の愛

一日の労働の終わりに（時田則雄）……226
永遠の妻恋（中村草田男）……228
ただ一人の「君」を想う夕暮れ（与謝野晶子）……234
妻をおくる歌（土屋文明）……237

あとがき……245
掲載作品一覧……248

第四章 恋のまっただなかで

❖逢ひ見ての後の心をめぐって

ここで時代をぐっとさかのぼり、平安の歌人の物思いに寄り添うことにしましょう。

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

権中納言敦忠（藤原敦忠）

【通釈】愛情を交わした後の思慕の情の切実さを比較してみれば、逢瀬以前の心情は、物思いとは言えないほど、取るに足らないものであった。

＊――通釈は、『拾遺和歌集　新日本古典文学大系』（岩波書店）より。

＊＊――三番目の勅撰和歌集『拾遺和歌集』（平安時代に成立）収載。ただし岩波書店の『新日本古典文学大系』では「昔は物も」となっています。

＊＊＊――「初めて女のもとにまかりて、またの朝につかはしける」（『拾遺抄』での詞書）から、はじめてともに一夜を過ごした女性のもとに贈った後朝の歌と、ここではと

らえます。

①「きぬぎぬ」。脱いだ衣を重ねて共寝をした翌朝、めいめいの着物を身につけ、別れること。また、その朝。（岩波古語辞典）

②「あひみる」。男と女が逢う。契りを結ぶ。「あふ」も「みる」も、ともに男女の交りを意味する（平安時代、成人の女が男に顔を見せるのは特別な場合であった）。（岩波古語辞典）

百人一首にとられている絶唱。思い焦がれる女性との恋をやっと成就させることができた作者です。思いが叶い、はじめて彼女と契りを結ぶことができました。ところが、彼女のもとから帰ってきたいま、恋心はますます激しく燃えあがっています。逢えたことに満足し、その喜びに浸っているどころか、また逢いたいという思いを一途に募らせています。それは狂おしいほどで、むしろ苦悩とすらよべるでしょう。

私は「昔は」に惹かれます。一夜を境に、きのうが「昔」になる時間感覚※。恋いこがれた女性との昨夜の契りは、作者にとっての歴史的事件だったのです。きのうときょうとでは、私の内なる時間の質がぜんぜん変わってしまった。十世紀前半を生きた青年が恋人に告白します。「僕はまるでちがってしまったのだ※※」と。

そして彼の女性へのひたむきな思いとその率直な愛情表現は、一千百年以上も多くの人びとから愛されてきましたし、これからも愛されつづけることでしょう。

※――巨大な歴史的事件がこのような時間感覚をもたらします。日本近代史上の事件をひとつ挙げれば、一九四一年十二月八日。日本軍のハワイ真珠湾攻撃による太平洋戦争への突入です。詩人・高村光太郎は、この歴史的瞬間を「昨日は遠い昔となり、／遠い昔が今となつた」と記しています（詩「暗愚小伝」中「真珠湾の日」の一節）。

※※――「僕はまるでちがってしまったのだ／なるほど僕は昨日と同じネクタイをして／昨日と同じように貧乏で／昨日と同じように何にも取柄がない／それでも僕はまるでちがってしまったのだ」（黒田三郎「僕はまるでちがって」より。詩集『ひとりの女に』収載）。恋のまっただなかにおいて、戦後最高の恋愛詩集と評価される、詩集『ひとりの女に』を表した詩人と、平安の青年歌人の体温は同じです。

❖課　題――9

敦忠の詩情を、現代のあなたが変奏しましょう。「逢ひ見ての」を初句に置いて短歌を詠みましょう。

逢ひ見ての

【生徒作品……課題9】

逢ひ見ての後の心をひきずって秋の河原で石投げている　［隆さん］

逢ひ見ての後の心に君居ればすぐに取り出す携帯電話　［和子さん］

逢ひ見ての後の心のふしぎさよふつうのバラがバラを主張す　［茂さん］

◉――心の不思議さに思いを馳せる作者。北原白秋の「薔薇二曲」を連想します。「薔薇ノ木ニ／薔薇ノ花サク。／ナニゴトノ不思議ナケレド。」（『白金之独楽』〈一九一四・大正三年〉）

逢ひ見ての後の姿にくらぶれば昔は影を追いかけていた　［洋子さん］

◉――それぞれの詠みぶりに、現在のその人が「逢ひ見る」ことをどのようにとらえているのか。これもまた、それぞれの経験が呼び寄せた意味の多様性がおもしろい。

【補記】

高校一年のとき。古典を教えていただいたのはY先生。古典漢文の深い教養を身につけた教師でした。漢詩の授業で、その最後におかれたのは先生みずからの吟詠（ぎんえい）でした。校舎じゅうに響きわたる朗朗たる声に、生徒は聴きひたっていました。作品にかんする逸話を

まじえた巧みな講義に、Y先生の古典は生徒にもっとも人気のある授業となっていました。

和歌の授業の一こまです。教科書には、この歌をふくめて二十首ほどが載っていました。先生は一つひとつの歌について、持ち前のウィットに富んだ解説と朗詠とで授業を進めていました。ところが、この歌に至ったとたんに先生のなごやかな表情ががらっと変わりました。笑顔が消え、なにやらむずかしい顔になりました。そうして、こんなことをつぶやきました。

「どうしてこんな歌がのってるんだ。（教科書に）こんなのをのせていいのかなあ……」

私も同級生も、先生のつぶやきの意味がわかりませんでした。ただ、先生の表情の突然の変化に生徒はみな、はっとしました。「この歌に、なにがあったの？」

黒板のまえに立ったまま、先生はしばらく考えていました。沈黙した生徒の視線は先生の口もとに集まり、つぎに発せられることばを待っています。はりつめた空気が支配する教室。そのなかで私たちは、十五歳の高校生が知らない世界、先生は知っているけれど、それを生徒には面と向かって言えない王朝貴族の世界の一面、すなわち男女間の密やかな世界がこの歌に詠まれていることを感じとったのです。

「よし」。踏んぎりをつけた先生の解説は、ごくあっさりとしたものでした。